

第9回 ヒンドゥー教の神々

1. ヒンドゥーの神々

インドでは町を歩いているだけで、あちこちに神様を見ることができる。神様のプロマイドや、神像を売る店が繁盛していて、まさに人気者といった感じだ。インドの古代宗教は自然崇拜に端を発したが、やがてアーリア人の神や、無数の土着の祖霊神、土族の守護神と結びついて、汎神（あらゆるものに神聖が宿る）教となっている。

1. 三大神

ブラフマー、ヴィシュヌ、シヴァは、究極は同一の存在であるという思想。一般にブラフマーが世界創造の神、ヴィシュヌが維持の神、シヴァが破壊の神とされている。一番人気はシヴァ、次にヴィシュヌ、ブラフマーは押され気味。

2. ヴィシュヌの化身

ヴィシュヌ神の特徴は、アヴァターラ（権化）することで、おびたしい土着の神を吸収して、数多い神話を生んだ。特に衆生救済のために現れた次の10種の権化がポピュラー。

- ① マツヤ（魚）：大洪水から救う。
- ② クールマ（亀）：乳海大攪拌の時、大海の底で旋回軸となる。
- ③ ヴァラーハ（猪）：魔神にとらえられ、水中に沈んでいた大地を牙で持ち上げた。
- ④ ナラシンハ（人獅子）：人、神、動物にも負けない魔神ヒラニヤカシブを殺す。
- ⑤ ヴァーマナ（小人）：魔王バリに三歩の土地を要求した。
- ⑥ パシュラーマ：斧を持ったラーマ。クシャトリア族を滅ぼす。
- ⑦ ラーマ：ラーマヤナの主人公で、理想の女性像シーターの夫
- ⑧ クリシュナ：全インド女性のあこがれの的。
- ⑨ ブッダ（仏陀）：仏教の衰退に乗じてヒンドゥー教の優秀さを誇示。
- ⑩ カルキ：世界の第四期（末期）に出現し、人類を救う。

3. ヴィシュヌの妃

ラクシュミー（吉祥天女）：世界が現れたときガンジスの聖水をかけられて、富と幸運を司る女神となった。

5. ブラフマーの妃

サラスヴァティー（弁財天女）：手にヴィーナを持つ。学問、枝芸の女神。

6. シヴァの別名と妃と子

シヴァは両性具有の神で、リンガ（男根）、シャクティ（女性の力）崇拝が有名。シャクティ崇拝は多くのシヴァ妃を生み出した。また土着の神と結びついて、ナタラージャ（舞踊の王）、パシュパティ（家畜の主）、マハーカーラ（大黒）など別名を1,000個以上持っている。

シヴァの妃は①パールヴァティー（ウマーともいう）：山にすむ女神。この世の美を一身に供えた。②サティー：貞操な妻。火中に身を投じて夫の跡を追った。女神霊場。

③ドゥルガ：大母神。水牛の魔神を殺す。④カーリー：カーラ（時）を呑み込む女神。黒色の女神。好戦的で血を好む。

シヴァの子は①ガネーシャ（ガネッシュ）：長男。象頭した知恵と幸運の神。

7. その他の神々

- ①太陽の神スーリヤ：すべての動物や無生物の守護神
- ②河の神ガンガー：聖なる河ガンジス河を神格化した女神
- ③猿の神ハヌマーン：ヒマラヤの峰を持ち去る。ランカまで一またぎ。
- ④蛇の神タクシャカ：蛇族（ナーガ）の王の1神。
- ⑤聖鳥ガルダ：ヴィシュヌの乗り物。体は人間、その他は鷲。
- ⑥聖樹トゥラシー：ラクシュミーの化身。

○参考文献

- ・ 菅沼晃『インド神話伝説辞典』東京堂出版、1985
- ・ 立川武蔵『ヒンドゥー教の神々』せりか書房、1981
- ・ 鹿野勝彦『絵ときガイド インド』日本交通公社、1987



写真 31 カーリー



写真 32 ハヌマーン